

ていきましたけれども、今度はまた別の、家庭という共通の話題もできました。

研究においてはやはり、学部生時代から将来研究しようと心に決めていた有機薄膜太陽電池の研究を、そのパイオニアである平本先生のもとでできたこと、また、総研大のご支援により、もう一人のパイオニアであるC. W. Tang先生のもとへ派遣いただいたことは、どちらも他に代えることのできない大切な経験です。

現在、東京農工大学の物理システム工学科で、テニュアトラックの准教授

として研究室を立ち上げ中です。異動が決まってから、異動先の農工大の小金井キャンパスが、高校1年生の夏休みに体験入学で初めて大学の研究に接した場所であることを思い出し、不思議な縁を感じました。

時が経つのは早く、研究室の立ち上げに、初めての授業に、と取り組むうちに、4年生が4人配属され、週一コマ授業もするようになり、昨年11月に岡崎を離れた時にはまだ歩き始めたばかりだった1歳の息子も、もう、うさぐらいに走り回るようになり、言葉

も覚え、3歳の娘はもう私や妻の冗談をたしなめる程になりました。

そんな、どんどん過ぎる時に置いていかれぬよう、自らを省みる毎日ですが、学生が自分を踏み越えて大きく巣立っていけるような、それでいてより大きな研究成果を得られるような研究室を作っていきたいと思います。その中で分子研や、分子研で出会った人達とまた、関わらせていただくことができたら本当に嬉しいです。今後ともどうぞよろしく願いいたします。



## 外国人研究者の紹介

### Prof. Hyung J. Kim from Korea

この分子研レターズが出るころには、Carnegie Mellon 大学化学科のHyung J. Kim 教授が今年度2人目の客員教授として理論・計算領域に滞在予定である。Kim 教授は韓国で修士課程を修了した後、液体論で著名なStony Brook大学のFriedman教授の下で学位をとり、Colorado大学のHynes教授のグループでのポスドクを経て、1992年からCarnegie Mellon 大学で研究を進めている。

Kim 教授は、均一および不均一環境での溶媒和ダイナミクスや誘電緩和など化学反応や、それに関連する現象の理論研究を行っている。理論モデルとab initio計算、およびシミュレーションを用い、極性溶媒やイオン液体中の反応過程の自由エネルギーやダイナミクスの解析を行っており、イオン液体における超高速溶媒和ダイナミクスや誘電性質の温度依存性などについて研究を進めている。これら以外にも、界面、

制限空間、バルクの異なる環境下のイオン液体での化学反応、緩和過程、輸送現象などの現象の理論研究を行っている。さらに、イオン液体の応用としてのエネルギー貯蔵・変換などに関する研究も行っている。これらの研究により、2013年には韓国科学技術学術会議のFrontier Research Scientistにも選出されている。

Kim 教授は家族思いの良い父親であり、旅行を趣味としているとのこと。分子研滞在中にはご夫妻で日本各地を訪問し、日本の様々な文化にも触れたいとのことである。Kim 教授をお見かけすることがあれば、気軽に声をかけてあげてください。

(齊藤 真司 記)

